

私の稀観本ノート

その32

○十二の遠景(中央公論社刊)

高橋睦郎著

椎窓 猛



去る7月の『黄櫨』の  
会文章講座で、安保先生  
は、詩人Tが詩人として  
世の認知を受けるまでに

如何に苦勞したか、その話を聞かれないき  
さつを語られていたが、詩人T氏と何故仮  
称で実名を挙げられないのか、疑問に思っ  
た。あとでそれをお尋ねしたところ、あま  
りにも悲惨な生いたちでプライバシーを侵  
害しては——と思いやってと申された。

T詩人即ち高橋睦郎自身、その生いたち  
についてはすでに実直に描いた著書がある。  
中央公論社刊「十二の遠景」昭和45年の刊  
行。したがって37年余の年月が経過。安保  
先生の話に触発され、書棚から久しぶりに  
とりだしてみた。帯に三島由紀夫が「黒光  
りする堅固な散文」と賞讃している。本の

黄櫨の会・自分史図書館だより



平成19年8月10日 筑後市野町428-8  
〒833-0032・TEL 0942・53・8122

これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。

なかには高橋さんから貰ったハガキもはさ  
まっていた。「玉信、恐縮いたしました」  
と独特な筆蹟である。「八女につながる縁  
かりそめならずと申して下さることをあ  
りがたく存じております」とあるが、この  
十二景のなかには、こんなくだりがある。

「祖母ツイは十八のとき、八女郡の平地に  
ある田形の在から、山奥の辺春まで数里の  
道を歩いて嫁入りした」

婚礼の席ではじめて夫と  
なる人に引き合わされて、  
ツイは「ほう、こん人あ  
片目ばいと思ったそうだ」



○天の雫

上村 忠雄



ちちははの在す御堂の花まつり  
読経のこゑに他力をおもふ  
日向神のさくらもみぢの木漏れ日を  
はだらに受けて湖畔に憩ふ  
帰ろかと鋤を片手に背伸びする  
八十路の友をつつむ夕焼け

病む妻の腕にあまたの針のあと  
子らを抱きし過去を持つうで  
きさらぎや筑紫のあさの梅林寺  
すこし屈みて花の下ゆく  
——大牟田市下池町——  
(有明新報社刊)

受贈図書紹介②

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。  
あしからずご了承下さい。

- 図書館人生五十年……………木村 秀明 福岡市
- 少女昌恵……………川島 昌恵 小郡市
- リトルボーイ……………世良田 元 筑後市
- 芭蕉さんの悪戯……………八女川 瀬 松戸市
- 歌集風の森……………吉富 徳 北九州市
- 由布院に吹く風……………中谷健太郎 由布院
- 日本古代史の推理……………片伯部 旭 延岡市

- 戦陣と軍靴……………片伯部 實 延岡市
- 優しく生きる……………深町 建 福岡市
- 子の心親知らず……………船木 英示 福岡市
- 句集北を去る……………嶋田 一步 熱海市
- 心の杖……………池田 隆蔵 長崎県
- 八女地方伝承俚謡誌……………国武 久義 広川町
- 筑前江川谷……………多田 茂治 東京都
- 流風餘韻……………八女中33回生
- 九州寒雷合同句集……………川島 品代 立花町
- 歌集冬の構図……………加野 靖典 太宰府市
- 羅針盤……………加野 靖典 太宰府市
- 歌集吹生……………塩塚 常樹 立花町



○寺山修司歌集『田園に死す』

内藤 賢司

この歌集は、短歌のおもしろさを教えてくれると同時に、現代短歌への開眼を迫るような影響を私に与えてくれた歌集でした。

・生命線ひそかに変へむために

わが抽出しにある一本の釘

・売られたる夜の冬田へ一人来て

埋めゆく母の真赤な櫛を

・かくれんぼの鬼とかれざるまま老いて

誰をさがしにくる村祭

・吸ひさしの煙草で北を指すときの

北暗ければ望郷ならず

・孕みつつ屠らるる番待つ牛に

われは呼吸を合はせてあたり

・わが息もて花粉どこまでとばすとも

青森県を越ゆる由なし

・春の野にしまひ忘れて来し椅子は

鬼となるまでわがためのもの

・地球儀の陽のあたらざる裏がはに

われ在り一人青ざめながら

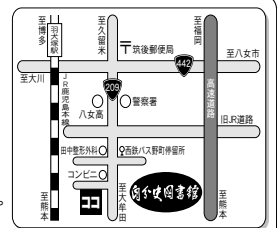
昭和四十年八月、寺山修司が二十八歳のときに出した第三歌集。白玉書房刊。

この歌集は、短歌として展開された「故郷論」でした。〈故郷〉についての寺山の思いがちりばめられています。それは、〈私〉を閉ざすもの、〈私〉の脱出を阻むもの、そこで老いそこで死んでいく場所、愛よりも憎が渦巻くところ、生命線を変えることで〈鬼〉になって恨みをはらさんとするとところ等々。例えば引用の二首目。売られた田んぼに母の真っ赤な櫛を埋めるのはどうしてでしょうか。貧しさ故に売られゆく田んぼ。そこには、そうするしかなかった母の思いを受け止めている少年がいるようです。母の真っ赤な櫛を埋め置くことで、母の悔しさ悲しさを「ノン」という意志として突き立てようとしている少年のいることが、私には読めます。いや、どのように読んでもいいのです。そこに展開されているドラマを各自が自由に読んでいけばいいのです。このようにテーマ性という面から衝撃を与えてくれた歌集でした。

そして、もう一つ。短歌における私＝作者という図式を破壊した歌集でもあります。ここにある〈私〉は、仮構された〈私〉です。したがって、それは「作者」ではありません。あくまで語り手としての〈私〉なのです。作者はその裏にいて、〈私〉を操作しています。作者は〈私〉にドラマを演じさせています。短歌における〈私〉が作者自身に閉じていくものでしかなかったそれまでの短歌のあり様に変革を迫ったのです。現代短歌における〈私〉とは何かという問いかけをした歌集でもありました。

自分史図書館

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。  
貸し出しはしておりません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitsokan

編集掌記

▼短歌誌をえいえいと刊行の発行者であり、歌人の内藤賢司氏より「寺山修司の短歌」についてエッセーをいただいた。ありがたう、さっそく掲載。独自の

寺山修司をとおしての短歌論である。▼安保教授の丁詩人論から、かつて読んだ高橋睦郎の「十二の遠景」に、寺山修司の青春歌集を書棚からとりだし、再読の機縁を得た。寺山修司の年譜をめぐってみると、彼は昭和58年、肝硬変で、享年47歳。「言い負けて風の又三郎たらん希いもてり海青き日は」▼この夏は日本列島に異変つづきである。台風4号から思いもかけぬ中越沖地震。いつ、どこで、なにがおきるか、世は不定、無明である。▼心して、世に処していかなければならぬ。山峡くれば、早々にヒグラシの音が鳴きわたる。一抹の哀愁が漂ってくる。

(自分史図書館長 椎窓)

